

巨大地震はいつ来るかわからない、原発ゼロ今すぐ。

マ通販生活

2015
秋冬号

180円

戦争が終つて
僕等は生まれた
戦争を知らずに
僕等は育つた

おとなになつて
歩きはじめる

平和の歌を
くちずさみながう

僕等の名前を
覚えてほしい

戦争を知らない
子供たちや

作詞 きたやまおさむ(1946年生まれ)
作曲 杉田二郎(1946年生まれ)

この歌をこれからも
歌える国でありますように。



要介護5のコータリさん、

バリアフリーの 旅に出る。

通販生活の
体験ルポ
第2弾

2011年9月、重度くも膜下出血で倒れ、いまも左半身に麻痺が残る
コラムニストの神足裕司さん(58歳)。本年春号では「最新介護ロボット」を体当たりで試し、
その性能や使い勝手をルポしていただきました。第2弾のテーマはからだが不自由だと不便なことの多い「旅」。
要介護5のコータリさんは、はたしてどんな旅をすることができるのか。

取材・文／神足裕司 撮影／在津完哉

娘・文子さん(右・20歳)と
二人で向かった先は!?



こうたり・ゆうじ

1957年、広島県生まれ。大学時代からライター活動を始め、
グルメレポート漫画『恨ミシュラン』(西原理恵子さんとの共著)
がベストセラーに。くも膜下出血
から復帰後の著書に、『一度、
死んでみましたが』、『生きていく
食事』(妻・明子さんとの共著)、
『父と息子の大闘病日記』(長
男・祐太郎さんとの共著)。



車輪が浮き輪になっている「チエアボート」に乗って海へと入る。
トラベルヘルパーの古矢さん(右)は、介護だけでなく旅行全般を助けてくれる。



あ・える俱楽部の
オーダーメイド旅行

「トラベルヘルパーの力を借りて、 娘との一人旅」という 夢をかなえてしました。

ボクには夢がふたつある。「昔のように海でどこまでも泳いで行きたい」というものと「車椅子でマラソンに参加してみたい」というどちらも今の体ではちょっと遠い夢だ。

それと「息子が20歳になつたら飲みに行こう」「娘が20歳になつたら一人で旅行に行こう」と子どもが生まれたときから決めていた夢があった。息子が20歳のときは神保町の行きつけの店に連れて行った。今度は今年20歳になつた娘と旅行に行く番だ。

しかしやつぱり無理かなあ、娘一人ではボクを介護しきれないだろうと思っていた。そんなある日テレビを見ていると、オーダーメイドでどんな要望にも応えてくれる「介護旅行」というのをやっていた。旅行専門の「トラベルヘルパー」がつくという。

その番組で旅行していた人はもう年配だったけれどご主人が車椅子。山が大好きでもう一度登りたい、奥様もお花が大好きなので山に登つたら一人で散策する時間を作つて欲しいというオーダーだったと思う。ロープウェイでかなりの高さまで登れる山を探し、中腹のロッジに泊まる。奥様のゆっくりとした散策の時間もある。これなら娘と一緒に旅行に

行けるかもしさないと思つていた。

紹介されていた「あ・える俱楽部」という介護旅行の専門会社に連絡して資料を取り寄せた。身体の状況などを所定の書面に書き込んでまずは旅行についての相談になるのだが、驚いたことに電話やテレビ電話で行われることが多いそうだ。そもそも事務所まで出向くことが難しいお客様が多いと聞いて納得したが、ボクは事務所に伺うこととした。こんな旅がしたいということ、自分にこんなバリアがあるけれど大丈夫かななど妻と二者打ち合わせをしたかつたからだ。

「娘と二人で旅をしたい」「きれいな海で泳ぎたい」「美味しいものを食べたい」あと娘からリクエストで「きれいな星空をみたい」というのも付け加えてもらつた。相談の結果、目的地は娘が生まれる前に家族で行つたことのある宮古島に決まった。

ボクは発病後初めて飛行機に乗るので主治医にも相談して万全に備えた。娘と一緒に困ったことがおこつては大変だ。車椅子で飛行機を利用するのも初めてだつたし色々不安はあった。けれど、行程表や見積りができるがつて契約したり、できないと思つていた

お父さん、
大丈夫?

ことが形になりつつある。それはちょっと夢を見ているようでもあった。

前日には同行してくれるトラベルヘルパーの古矢一岳さんからも電話が入った。介護ヘルパーの資格はもちろん旅行専門のトラベル一般をサポートしてくださる方だ。もちろん旅行費用にはトラベルヘルパーさんの介護費用や旅費も加算され含まれている。「寝るときはこれを着せてください」「少し時間があつたら横にしてください」「日焼け止めはたっぷりね」などなど家に残る妻からの細かなオーダーが入ったようだ。

飛行機は、バリアを持ったボクに優しい乗り物だった。

そして待ちに待った当日。飛行機はバリアを持ったボクに優しい乗り物だった。羽田空港でアドバイザーの堀場沙織さんとどんな旅行にするか打ち合わせ。③羽田空港でトラベルヘルパーの古矢さんと待ち合わせ。普段は依頼者の自宅まで迎えに行く場合が多いという。④羽田空港でのチェックインは、障害者専用カウンターで行なった。⑤飛行機内は外輪の外れる特別な車椅子で移動。トラベルヘルパーが移乗ってくれる。



①

①移動、排泄、入浴、食事、注意事項など、身体の状態を細かく記入した「身体状況お伺書」を提出するところから旅が始まる。②神足さんのメモをもとに、あ・える俱楽部代表の篠塚恭一さん、介護旅行アドバイザーの堀場沙織さんとどんな旅行にするかを打ち合わせ。③羽田空港でトラベルヘルパーの古矢さんと待ち合わせ。普段は依頼者の自宅まで迎えに行く場合が多いという。④羽田空港でのチェックインは、障害者専用カウンターで行なった。⑤飛行機内は外輪の外れる特別な車椅子で移動。トラベルヘルパーが移乗ってくれる。

ボクの二人旅という雰囲気を壊さないぐらいにちょうどいい

ちょっと高価な買い物だったかもしれない

が、行つてよかつた。つくづくそう思う。

矢さんがやつてくれる。チエックインしてちよつとベッドに横になつたり、トイレに連れて行つてくれたり、着替えさせてくれたり、お風呂に入れてくれたり。夕食になれば一緒に食卓を囲み食事介助もしてくれる。最後に就寝の準備を整えて古矢さんが自分の部屋に戻るまで

何度部屋を行つたりきたりしてくれたんだろう。ボクは夜は介護なしの「ヘルパーと別室」という選択をしたが、オーダーメイドだからもちろん夜も同室にだつてできる。古矢さんは娘と

どよく一緒にいてくれた。
翌日、今回の旅のメインイベントである海に行く。あいにく台風接近で沖にでるモーターボートは欠航。シユノーケリングポイントまでは行けなかつたがチエアボートに乗つて海にぶかぶか浮かぶことはできた。それに娘のたつての希望だった「星空をみること」は、余りのきれいさに言葉も出ないぐらい。着実にひとつずつ夢をかなえてしまつた。

20歳になつた娘と二人旅ができるなんて世のお父さんたちに羨望のまなざしをむけられたそうだ。こんな体になつて一度あきらめかけた色々なことが、こうしてできるようになることは普通にできたことの10倍も20倍も嬉しく思える。「あきらめていたことができる」これは本当にすごい。

ちょっとと高価な買い物だったかもしれないが、行つてよかつた。つくづくそう思う。

あ・える俱楽部

東京都渋谷区
南平台町6-11
ジョイヒルズ4階
☎03-6415-6480
<http://www.aelclub.com/>

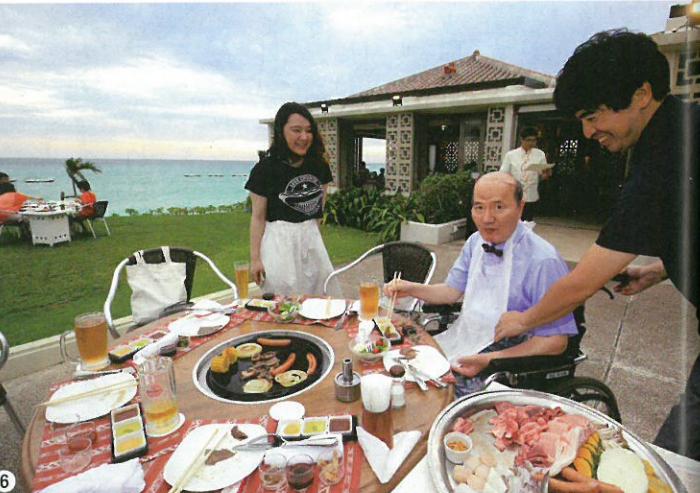
旅の料金

- 旅行代金 527,360円(3名)
宮古島東急ホテル&リゾーツユニバーサルルーム宿泊(2泊)、航空券、トラベルヘルパーの旅費等すべて含む。
- トラベルヘルパー料 81,000円(3日)
- 介護タクシー料 29,000円(2日)

港でのチエックインと手荷物の預け入れは専用のカウンターで行われるのでいたつてスムーズだ。ここで機内まで移動できる車椅子に伝つてくれてボクも娘もなんの苦労もなく乗り降りできた。失礼な言い方かもしれないが空港や航空会社の方々は本当によく訓練されていると感じた。那覇での乗り換えもスマーズなおか安全にすませてくれた。

宮古島空港では旅行会社が手配してくれた介護タクシーが待つていた。それに乗つて昼ごはんを食べたりちょっと寄り道なんていうのもできる。オーダーメイドの旅だから他の人に気兼ねすることなく細かなリクエストも入れられる。

介護のことはすべてトラベルヘルパーの古



⑥食事介助だけでなく、トイレ、入浴、移乗と、介護ケアのほとんどをトラベルヘルパーが行なう。⑦神足さんが昼寝をするあいだ、文子さんは出張のリフレクソロジー(マッサージ)を受けリラックス。



体験後記

妻

ずっと心配して待っていたけれど、なんのことなくニコニコで帰つてくる。明子

キメ細やかな「バリアフリーの旅」の提案が今後、もっと重要視されてもいいと思う。

神足裕司

「旅行に行きたい」それすらなかなか億劫で言葉に出せないでいた。車椅子で体が不自由なボクが旅行に行くなんて大掛かりなことで想像してみただけでボクも家族も大変だ。それが今回「妻と二人で」「娘と二人で」「自分一人で」そんな冒険ができてしまった。

重い腰を上げて本当によかつた。介護の問題についても、バリアフリーについても、こんなに問題視されているのになかなか世の中はスムーズに機能していない。そう思つていた。

それでも10年前に比べればずいぶんバリアフリーな世の中になってきた。以前から交通機関は日本におけるバリアフリーアリードしてきたようを感じていたが、今回久しぶりに飛行機に乗つてまたまた進化したなあと実感した。羽田から沖縄、宮古島に到着するまでの不安に思つていたことは何の問題もなくクリアされていった。

「移動すること」それが一番のネックであるボクたちにとっては心強い進化だ。飛行機も新幹線も在来線も路線バスもバリアフリーへの取り組みは目を見張る。けれど、バリアフリーのキメ

細やかな旅を提案してくれる旅行会社や観光バスはまだまだ少ない。

今回の日帰りの旅でお世話になつたクラブツーリズムさんだつて採算度外視なんだろうなと、心配になつてしまふ。この産業が軌道に乗るのは先の話かもしれない。でも、これから更に高齢化していく日本でもっと重要視されてもいいことだと思うのだ。

沖縄に出かけたときも、私は気が気でなく帰つてくるまでずっと心配していました。けれど、なんてことなくニコニコで帰つてくるのです。しかも本

したり、仕事に出たりということはありませんが、考えてみたら外出をすることが今回旅で色々な可能性の扉が開いたような気がします。一人で「お出かけ日和」に出かけたときも、娘と一緒に帰つてくるまでずっと心配していました。

主人が車椅子の生活になつてから、子どもと主人二人で、ましてや主人一人で外出なんて考えてもいませんでした。旅となればなおさらのこと。私はたまにお昼を行つたりお散歩

したり、仕事に出たりということはありませんが、考えてみたら外出をすることが今回旅で色々な可能性の扉が開いたような気がします。一人で「お出かけ日和」に出かけたときも、娘と一緒に帰つてくるまでずっと心配していました。

当にうれしそうに。主人のためにも家族のためにも旅に出てみて本当によかったと思っています。



娘

かなりバリアのある父との一人旅ができるうれしかった。文子

自分はお父さんっ子だったので、昔から父と二人で外出することには何の抵抗もありません。でも、体が不自由になつて初めて母や兄のいない長い時間で過ごすことには少し不安がありました。

羽田から沖縄、宮古島に到着するまでの不安に思つていたことは何の問題もなくクリアされていった。

「移動すること」それが一番のネックであるボクたちにとっては心強い進化だ。

飛行機も新幹線も在来線も路線バスもバリアフリーへの取り組みは目を

見張る。けれど、バリアフリーのキメ

ありました。実際にトラベルヘルパーさんにほとんどことを助けていただいて困ることはなく、純粹に旅を楽しむことができました。

宮古島の夜は、東京では考えられな



いほどたくさん星が見え、父が予想以上に興味を示したので二人でずっと上を向いて星を見ていたことは印象的で、旅の一番の思い出になりました。

本当にきれいな夜空でした。

普通の親子でも一生に一度あるかないかの父との二人旅、ましてやかなりのバリアがある父との旅という貴重な体験ができる、とてもうれしかったで